

エリカ (M) 「これから始まるのは、生ボイスドラマコーナーです！」

エリカ (M) 「どこかにある『カルモア学園』にノール先輩とわたし、候補生エリカが学生として潜入して、学園にはびこる悪臭の元を消臭して、世界から悪臭をなくすために戦うと言うお話です」

エリカ (M) 「タイトルは——『デオフェアリーノールと秘密の部室』」

エリカ (M) 「これは、愛と勇気と真実と消臭の物語である」

エリカ (M) 「出演…デオフェアリー・ノール、秋山えりか、スタッフ先輩、カメラマンさん、かみじょー」

エリカ (M) 「脚本、上城友幸」

エリカ (M) 「では、物語……スタート!!」

一拍の間

ノール（M） 「『デオフェアリー・ノールと秘密の部屋』

スメル12『四天王』」

一拍の間

ノール（M） 「わたしの名前はノール。どこにでもいる、普通のデオフェアリーなの！この世界から悪いにおいをなくすため、カルモア学園の学生になって、人間の世界を見守っているんだ」

SE…ノックの音。

SE…ガチャ！とドアが開く音。

エリカ 「おはようございます、お姉様！」

ノール（M）「この、ノールのことを『お姉様』と呼ぶ騒がしい子は、後輩のエリカ。実はデオファエアリー候補生なんだけど、ノールと一緒にカルモア学園で消臭の任務についているんだよね」

えり「おはようございます」

ノール（M）「こっちの、あざといロリっ子は、後輩のえり。

新生で、消臭部に入部してきた変わった子。

どんな子なのか、まだ、よくわかんないんだよね」

えり「おやすみをいただきました、ありがとうございます」

ノール「ソーだね、休みだったんだよね」

エリカ「とても学校とは思えない挨拶ですね」

一拍の間

ノール「そいやあ！」

エリカ「今週はどんな格好ですか？」

ノール「今日は、駄目なひとには見えないセーラー服〜！」

エリカ「何でセーラー服なんですか？」

ノール「9月20日でしたらべたら、おニャン子クラブが解散した

日なんだって」

エリカ「いきなり昭和ネタですか？ 最近、開き直ってますね、

お姉様」

えり「誕生日のかたは、どなたかいらっしゃいますかねえ」

ノール「かみじょーが好きなゲームネタで、橘右京（たちばな・

うきょう）の誕生日だって言ってた」

エリカ「余命幾ばくもないって言う設定の割に、シリーズ作品

ほとんど全部に出てくるキャラですね。っていうか、

もうSNKはそっとしておきましょう！」

ノール「あと……吉田松陰の誕生日だって」

えり「ふあ〜、吉田松陰と言えば『吉田松陰物語』ですねえ」

エリカ「なんで知ってるの、そんな歌！ 歌わないでね、BAN
されちゃうから！」

ノール「広告設定はR18だから、大丈夫じゃない？」

エリカ「ダメです！ 放送禁止ソングですよ、アレ！」

えり「気になるかたは、検索してみてください」

エリカ「なんでそんなに、つボイノリオを推すの!？」

ノール「すごいね。今日もツツコミがさえてるね、エリカ」

エリカ「ええ、ええ……誰のせいでしょうね、いったい」

一拍の間

ノール「さて——逃がしたアンモニアをなんとかしなくちゃだよ」

えり「はい？ アンモニアは消臭しましたよね？」

ノール「先週、復活した。しかも、逃げられた」

えり「ふええ……」

ノール「そこでっ！ リベンジのために、もう一度同じトコに

行こうと思う！」

エリカ「なるほど、二度あることは三度あるっていいいますからね」
ノール「そんなわけで、今日も体育館の裏に行こう」

エリカ「了解です」

ノール「そして……ダメな人には見えない、猫缶く！」

エリカ「猫もリベンジですか？」

ノール「奮発して、先週よりも高い缶詰買ってきた！ スプーン
で缶をたたただけで、にゃんこが足下でスタンバイする

レベル」

エリカ「あの……猫、必要ですか？」

ノール「にゃんこは必要とか必要じゃないとか、そういう次元で
語るものじゃないよ」

エリカ「なんで『良いこと言った』みたいな顔してるんですか!?

明らかに、お姉様が猫好きなだけですよね！」

えり「ふぁー、ねこさんかわいいですよ」

ノール「では、行ってみよう！」

エリカ「リベンジですねっ！」

えり「はわー、見つかるといいですねえ」

ノール「リベンジっ♪ リベンジっ♪」

SE…ガチャ、とドアが開く&閉まる音。

一拍の間

バスメル「やあ、ノールちゃん!!」

ノール「リベンジッ!!」

エリカ「い、いきなり王子が廊下につ!!」

えり「あうー、だんだんかみじょーの台本が、おざなりに

なっってきてますよう」

ノール「『とりあえず、こちら辺でバスメル出しとけ』

みたいななの、禁止っ!!」

エリカ「そういえば、『先週はラストで出したから、今週は

アーリーバスメルにしよう』って天の声が聞こえました

よ。火曜日くらいに」

ノール「もつと早く台本書くつ！ だから、バスメル王子パートが適當になるんだよっ！」

一拍の間

ノール（M）「そんなわけでえ……（やる気なさそうに）」

ノール（M）「この、いきなりうっとうしい、キラキラ二枚目のお兄ちゃんは『バスメル王子』」

ノール（M）「別にアラブかどこかの王子様ってワケじゃなくて、ニックネームってヤツ？」

ノール（M）「なんでか知らないけど、わたしのことを妙に慕っていて。何かというと、つきまとってクサイ台詞で口説こうしてるんだけど。ノール、クサイ台詞って大の苦手なんだよね」

一拍の間

バスメル「素敵な声だね——女神がラブソングを歌うと、こんな感じなんだろうね」

ノール「同意を求められても、わかりませーん」

エリカ「イメージとしてはウーピー・ゴールドバーグですかね」

一拍の間

えり「ふわあ〜……今日もロマンチックですねえ。素敵な歌に酔いしれたいですう（照れ）」

ノール・エリカ「だからー……っ!？」

ノール「とりあえず、公式ページで『い・つ・で・も』がダウンロード出来るから、それ聞きなさいっ!!」

エリカ「もう、バスメル王子に『吉田松陰物語』を歌って貰うんで、いいんじゃないですか？」

えり「はう〜、『い・つ・で・も』は、いつでもあなたのそばに、悪臭がいるよって歌詞じゃないですか〜!」

エリカ「あなたの部屋と靴の奥と、吐息にもいるって歌詞ですね」

ノール「すごく綺麗な曲だし、歌詞も流して聞けば気にならない

絶妙のバランスだから、大丈夫！」

バスメル「キミさえいれば、僕はどんなに臭くなってもいい……」

ノール「そしたら、即座に消すよ」

えり「はうう、愛のためにはどんな犠牲もいとわないんです

ねえ〜」

エリカ「どうして、こんなにポジティブにうけとめられるんです

かね？」

SE…携帯の着ボイス音

バスメル「……ああ、ドワンゴ・ドット・JPでダウンロード

販売している、ノールちゃんの着ボイスが」

えり「かわいいですねえ。どこで手に入るんですかあ？」

ノール「さあ、みんなお待ちかねのおく……」

ノール・エリカ「ステルスう！ マーケティングっ!!」

ノール「ドワンゴ・ドット・JP取り放題の会員登録をすれば、

いろいろな着ボイスがゲットできるから、えりも会員登録

録した方がいいよ」

えり「はい、ありがとうございますう！」

エリカ「でも、こんなこと教えちゃったら、アクセスが殺到して、

ドワンゴさんのサーバーが落ちちゃうかもしれないね」

ノール「もう、我先に先を争ってね」

えり「放送がおわったら、皆さんいそいで登録してくださいね

え〜」

一拍の間

バスメル「すまない、行かなくてはいけなくなったよ」

ノール「はい、ごきげんよう（棒読み）」

バスメル「では、またあおう！ 恋のジョイフル・ジョイフル!!」

SE：歩く音（F・O）

一拍の間

ノール「まさかの『天使にラブソングを2』だったね」

エリカ「かろうじて平成ネタですね、珍しく」

えり「はう、1の『I Will Follow Him』も名曲ですよ」

エリカ「さて、行きますかお姉様？」

ノール「よし、リベンジっ！」

えり「りべんじー！」

SE：歩く音（F・O）

一拍の間

エリカ「さて、アンモニアはいますかね……？」

ノール「にゃんこどこだろ、にゃんこ」

えり「ねこさん、どこですか？」

エリカ「わかってますか？ 探さなきゃいけないのは、アンモニ

アですよっ!？」

えり「あ」

一拍の間

えり「あそこにいる、子猫ちゃんですかあ？」

ノール「にゃんこ！」

SE: 駆け寄る音

ノール「アハハハハッ！ にゃんこかわいいー！ にゃんこ

かわいいーっ！（着ボイス口調で）」

えり「はうう〜！ こねこかわいいですう〜!!」

エリカ「話きてませんね、ねこまっしぐらですね」

ノール「ほらほら、おいで〜！ 美味しいおいしいごはんだよ〜」

ノール「——あ」

SE:子猫の鳴き声

ノール「きたきたー！にゃんこかわいいー！」

えり「はわ〜！かわいいですねえ〜！」

エリカ「ここだけ見るとほほえましい光景ですね。目的を見失つてますけど」

ノール「食べてる食べてる！」

エリカ「ーん？」

えり「かわいいですう〜！」

エリカ「なんか……臭くないですか？」

ノール「……エリカ、腐ったタマネギ持ってたりますか？」

エリカ「もってるわけじゃないじゃないですか」

えり「下水臭いですねえ〜。エリカ先輩、ドブの蓋はずししましたかあ〜？」

エリカ「なんでそんなことする必要があるの!？」

ノール「にゃんこ♪ にゃんこ♪」

えり「にゃんこ♪ にゃんこ♪」

エリカ「この、にゃんこバカふたりっ!! 悪臭ですよ、コレ!？」

一拍の間

ジオ「猫の方が大事なのかな？」

メリー「あなたより、かわいいからね」

ジオ「……そりゃ、冷静な分析だね」

SE…それっぽい登場SE

えり「はわっ!？」

ノール「あれ……ポインじゃない」

メリー「そう? あなたよりあると思うけど」

エリカ「冷静な分析ですね」

ジオ「キミもそう思う?」

ノール「……どちらさま? (むすっ)」

一拍の間

ジオ「僕はあくしゅ……」

メリー「（上に思いつきりかぶせる感じで）わたしは悪臭四天王のひとり。悪臭17人衆のリーダーの、メチルメルカプタンのメリーよ」

ジオ「………悪臭四天王のジオスミンのジオ（なげやり）」

メリー「どうしたの、ジオ？ ごきげんね」

ジオ「ああ、まさかリーダーが先に名乗ると思っていたから。ただの四天王の僕はびっくりしちゃってね」

メリー「だいじょうぶよ、ジオ。あなたのこと、みんなそんなに気にしてないわ」

ジオ「……安心したよ、メリー」

一拍の間

エリカ「メチルメルカプタンとジオスミン!? どちらも『ノール
ってよんで』の歌詞にでてくる、番組でおなじみの悪臭
成分ですよね!？」

ノール「ジオスミン臭もふきとばすのよ♪」

エリカ「詳しくは、公式ホームページの『ボイス・楽曲』の
ところを見てくださいね」

ノール「え、これステマなの？」

一拍の間

メリー「ジオスミンが四天王なのはこの歌のおかげなのよね」

ジオ「……………え？」

メリー「上城が最初に設定考えるときに言ってたわ。『とりあえ

ず、歌に出てくるジオスミン』って」

ジオ「そうなんだ……………知らない情報だよね、それ」

一拍の間

エリカ「仲悪いんですかね？」

ノール「ジオスミンは雨降った後のニオイのもとで、ドブの

ニオイやカビのニオイのもとでもある。人間の鼻は特に
ジオスミン臭に敏感で、悪臭の代表格だから自信を持つ
て良いと思うけどね」

ジオ「ねえ、聞いた!? メリー、聞いた!？」

メリー「はいはい、よかったわね」

ノール「でも、メチルメルカプタンはタマネギの腐ったような

ニオイで、口臭の原因でもある強烈な悪臭成分。

可燃性のガスに、少し漏れただけでも気がつくように
混ぜられている『ガス臭さ』のもとになる成分だから、
ジオスミンとは正直格が違うけどね」

メリー「ねえ、聞いた？ ジオ、聞いた？（余裕）」

ジオ「……ああ、聞いてた（うんざり）」

エリカ「アンモニアじゃないですけど——お姉様、行きますか？」

ノール「おっけー！——華麗に変身ッ！ でおどあーっ!!」

SE・変身SE&BGM

ノール「見た目はキュートに、中身は本気！ デオフェアリー・ノール！」

一拍の間

メリー「やっぱり、この子だったんだ」

ジオ「ああ——猫と遊んでばかりいたから、違うと思ったけど」

エリカ「ほら、悪臭のひとたちもそう思ってますよ、お姉様」

ノール「変身前だから、正体がバレてないのはいいことだよ！」

一拍の間

メリー「どうしよう。デオフェアリーに目をつけられたってこと

は——わたしたち、消されちゃうのかしら？」

ジオ「大丈夫。キミはボクが守るよ」

メリー「本当に？」

ジオ「ああ、この身に代えても。ボクが消えても、キミのことはボクが必ず助けるんだ」

メリー「ありがとう。そしたらあなたのこと、しばらくわすれな
いわ」

ジオ「……しばらく？」

メリー「ええ、感謝しなくちゃ」

ジオ「いや、その……できれば『ずっと』にしてくれないかな
？」

メリー「ダメよ、最近忘れっぽいの」

ジオ「あく…………とりあえず、メモして」

メリー「……メモ？」

ジオ「そう——おっきな字で」

一拍の間

ノール「おのれー、ふたりの世界に入り込んでるなあ〜！」
エリカ「いや……そんなに甘い会話じゃない気がしますけど」

一拍の間

ジオ「ともあれ、先手必勝だ。行くぞっ！——トイレのニオイを臭塗っ！」

SE…臭塗っばいSE

エリカ「なんか、カビくさいです〜！」

ノール「雨降ったあとのドブのニオイだよ〜！」

ジオ「どうだい、ボクの威力を思い知ったかな？」

メリー「たたみかけましょう。わたしも——トイレのニオイを臭塗っ！」

SE..臭塗っぽいSE

エリカ「うっわ!? なんですか、コレ!!」

ノール「くさーいっ!! やっぱり、悪臭の格が違うーっ!!」

メリー「うふふ、どう?」

ジオ「格の話は、もういいんじゃないかな? (うんざり)」

ノール「もお、我慢のげんかーいっ!! とにかく、悪臭は消すっ

「!

ノール「ふたりまとめて、いくぞおく……」

ジオ「あぶないっ!」

SE..どん、と言う突き飛ばす音。

メリー「きゃっ!?!」

一拍の間

ノール「――らぶらぶ・ぽっぴんぱんちっ!」

SE: らぶらぶ・ぽっぴんぱんちっ! の SE

ジオ「うわー、だめだー!! (棒読み)」

SE: 悪臭退散の SE

メリー「ジオっ!」

ノール「あゝ!」

エリカ「あ、ジオスミンだけしか消えてませんよ、お姉様!!」

メリー「わたしの身代わりになったのね……」

ノール「してやられたく……夢の力をチャージしないと、連発は

ムリだよ（へろへろ）」

一拍の間

メリー「ありがとう、ジオ——あなたのこと、しばらくわすれな
いわ」

ノール「だから、ずっと覚えててあげてっ!!」

エリカ「身を挺してメリーを守り抜いたのに、浮かばれませんね

え……」

えり「はうう、献身的な愛の結晶ですう」

一拍の間

メリー「愛じゃないわね」

えり「ふあ〜?」

メリー「私の愛が、誰に向いているのか……わかっているでしょ

う——姉さん?」

一拍の間

ノール・エリカ 「「えーーーーーっ!?」」

ノール 「ひどいよね！ あそこまでやったのに、ジオへの愛を完全否定だよ！」

エリカ 「それもそうですけど、驚きのポイントはそこじゃありません、おねえさま!!」

一拍の間

ノール 「……いま、メチルメルカプタン…… 『姉さん』 って、

呼んだよね？」

エリカ 「はい、呼んでました…… 『姉さん』 って—— えりのことを」

一拍の間

ノール・エリカ「「どういうこと!?!」」
えり「は、はわあ~~~~!!」

一拍の間

エリカ(N)「こうして、ジオスミン——だけは消臭された」

エリカ(N)「さようならジオスミン。キミのことは、しばらく

わすれない」

エリカ(N)「というか、問題はそこではない」

エリカ(N)「『姉さん』って、一体どういうことだ？ えりは

一体何者なのだ？」

エリカ(N)「謎が謎を呼び、次週はいよいよ最終回！」

エリカ(N)「デオフェアリー・ノールの、消臭は——まだ、

終わらない……」

一拍の間

エリカ (N) 「漂う悪臭を、なんとする」
エリカ (N) 「芳香剤では、ごまかしきれぬ」
エリカ (N) 「換気扇でも、どうにもならぬ」
エリカ (N) 「マイクロゲルで、消臭する」
エリカ (N) 「また、来週も……」
ノール (N) 「『デオ・デオドアー!』」

おわり。